

氏名	中嶋 展子
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 4307号
学位授与の日付	平成23年3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」 —昭和八年を中心に—
学位論文審査委員	主査・教授 田仲 洋己 准教授 京 健治 准教授 西山 康一 准教授 山本 秀樹 鶴見大学教授 片山 倫太郎

## 学位論文内容の要旨

本論文は川端康成の作品中、従来あまり顧みられることのなかった戦前期の少女小説を中心的な研究対象として、その文学観の変遷を跡付けるものである。具体的には、川端の作品中に見える「をさなごころ」「むすめごころ」等の概念を探ることで、従来の川端研究の中で漠然と言われて来た〈昭和八年の文学的転機〉の内実をより具体的に説き明かすことを目指す。考察の過程で、川端が少女小説等を執筆する際に参考にしたと思われる文献資料を明らかにするなど、研究史的にも重要な指摘を数多く含んでいる。全体は序論及び第一章～第三章と結びから成り、A4版ワープロ打ち1ページ当り約1,720字で計138ページ、四百字詰め原稿用紙に換算して約590枚の分量に達する。

序論では、本論文の執筆意図と内容について略述するとともに、キーワードである「をさなごころ」と「むすめごころ」について説明し、論の方向性と論証の手順を示す。

第一章「川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」」では、川端文学の転機の年として注目される昭和八年の諸作品中に出現する「をさなごころ」について、その意義の変遷を、前後の時期の諸作品を視野に入れる形で論述する。また、若い女性や少女を主人公とする作品群を収めた単行本『むすめごころ』を取り上げ、同時期の川端文学の展開の中に位置付ける作業を試みている。

I 「『二十歳』論—「幼心」と「女性的なもの」—」では、昭和八年に発表された小説『二十歳』を取り上げ、そこに描かれた「幼心」「女性的なもの」の意味付けを、小説本文の丹念な読解を通じて浮彫りにする。また、川端が執筆の際に参照した『不良少年の研究』(大正12・4 大鏡閣)の記事内容との比較によって、「幼心」「女性的なもの」の重視にこの時期の川端文学の特質が窺い見られることを確認している。さらに、川端自身が書き残した「児童の綴方が文芸かどうかは問題だが、そのをさなごころに文芸の出発はあり、また常に帰郷がある。女性的なるものについても同じである」(『女性文章』序)という文章との脈絡について考察する。

II 「川端康成と少女の文集—西村アヤ・石丸夏子・山川弥千枝を中心に—」では、昭和

戦前期に盛んに刊行された児童作文集に関わる川端の発言を詳細に検証し、そこに窺われる川端の文学観について考察する。

Ⅲ『『むすめごころ』論—「幼い清らか」な少女から「子供のやうな」娘へ』では、『むすめごころ』の中で多用される「幼い清らか」という表現が登場人物の少女らしい心情を象っており、川端が自伝的な小説の中で尊重した「幼げ」「清らか」といった価値概念が、若い女性や少女を主人公にした青春小説の中でも重視されていることを論証する。

Ⅳ「昭和八年の川端康成—「をさなごころ」と「女性的なもの」」では、この前後の時期の川端作品中に登場する「をさなごころ」の在り方について考察する。就中、昭和八年に執筆された随筆『末期の眼』において一種の芸術観として示された「をさなごころ」の意義を重視し、その意味合いの変化について検証する。

第二章「川端康成の少女小説」では、個別の少女小説を取り上げ、書誌研究の成果を踏まえて現存草稿との比較を試み、作品の素材や歴史的、社会的背景との関わりについても分析する。

I『『乙女の港』論—「魔法」から「愛」へ・中里恒子草稿との比較から』では、中里恒子が下書きをした『乙女の港』草稿と完成版の小説を比較対照する手続きを経て、『乙女の港』に描き出された博愛の精神の意義について考察する。また、中里恒子との間に交された書簡の内容を検討することによって、後進作家の指導に対する川端の考えを検証する。

Ⅱ「川端康成の少女小説—『少女倶楽部』掲載作品の素材を中心に—」では、昭和八年に執筆された少女向け作品中に、当時使用されていた小学校教科書や教師用指導書の記事内容が素材として用いられていることを詳細に指摘する。併せて、『少女倶楽部』に連載された『学校の花』の授業風景の描写の中に、母恋のテーマが見て取れることを明らかにしている。

Ⅲ「川端康成と吉屋信子—片岡鉄兵『薔薇の戯れ』から—」では、同時期の少女雑誌で精力的に執筆をしていた吉屋信子、片岡鉄兵との交流について考証する。

Ⅳ「『薔薇の幽霊』と博文館『少女世界』」では、川端の初めての少女向け小説『薔薇の幽霊』が博文館発行の『少女世界』に掲載されたことを端緒として、『少女世界』へと繋がる川端の周辺作家の執筆活動を跡付ける。加えて、『薔薇の幽霊』の書き換え作品である『薔薇の家』との比較検討を行ない、その同性愛的な感情の深まりについて考察する。

第三章の「昭和八年と『眠れる美女』」では、昭和八年に執筆された名作『禽獣』を分析し、晩年を代表する傑作とされる『眠れる美女』との繋がりについて考察する。

I『『禽獣』論—千花子の“合掌の顔”と少女の“遺稿集”』—』では、第一章で明らかにした「をさなごころ」の変遷と少女の文集に対する川端の興味の在り方を踏まえて、小説『禽獣』を読み解く試みを展開する。

Ⅱ『『眠れる美女』論—祈りとなぐさめ—』では、『眠れる美女』の世界観と昭和八年前後の川端の文学観との繋がりについて考証する。『眠れる美女』における「死顔」「合掌」の描写に着目し、『禽獣』に描き出される千花子の「合掌の顔」との脈絡を指摘することで、慰めの文学としての『眠れる美女』の在り方を確認している。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2011年1月27日、学内審査委員4名、学外からの招聘審査委員1名の計5名によって行なわれた。専攻分野による内訳は、日本文学関係教員4名、日本語学関係教員1名である。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、以下のような結論に達した。

本論文は、川端康成が随筆『末期の眼』の中で語った、彼の文学的転機を意味するとされる「をさなごころ」という言葉をめぐって、「少女小説」「青春小説」といった従来の川端研究においてあまり注目を浴びることのなかった同時期の作品群を検証する作業を通して、詳細な分析と考察を加えたものである。

特に、その「少女小説」「青春小説」の分析においては、それらを製作する際に川端が参照した文献——当時の犯罪心理学の研究書や小学校教科書、さらには彼に師事する者の草稿類——や、彼が同時期に行っていた少女雑誌の選評やそこでの人物的交流など、従来の研究ではほとんど顧みられて来なかった各種の資料にまで詳細で具体的な調査が及び、川端康成研究に一石を投ずるばかりか、日本近代文学研究全体にとっても大きな貢献を為す様々な指摘、考察が展開されている。

ただ、そうした新しい意欲的な試みを繰り広げる一方で、論文自体の完成度については、問題皆無というわけではない。審査の過程において、以下のような問題点や残された課題についての指摘が為されている。

(1) 上記の如く、従来研究の及んでいない領域に着手した点は高く評価できるが、それが文学史あるいは思想史的に見てどのような意義を有するのか、といった広い視野に立つての考察という面では、若干手薄な部分がある。

(2) 本研究は最終的には、「をさなごころ」や「むすめごころ」といった語彙の使用の背景にある川端の芸術観を明らかにし、さらにそれを彼の代表作とされる『禽獣』（『改造』、昭8・7）や『眠れる美女』（『新潮』、昭35・1～6）等に繋げて分析、検討することを目論むものだが、その論述の過程において「をさなごころ」「むすめごころ」等の重要なタームの定義が揺らぎ、論理的な説明が成り立っていない箇所が僅かながら見出される。

(3) 上記(2)の指摘とも関わるが、論文中に取り上げた各作品について、より説得力のある、客観的かつ掘り下げた読解や考証が必要と思われる箇所がある。また、論証手続きの甘さと併せて文章の粗さが目に付き、論述の整理が行き届いていない印象を与える箇所が見受けられることも否定できない。

(4) 第一章・第二章の考察内容に対して第三章の『眠れる美女』論がやや孤立しており、戦前期の川端の文学観との脈絡が必ずしも明快に論証されていない憾みが残る。

以上のように、本論文にはいくつかの課題や問題点は残るが、それらは論文全体の価値を致命的に損なうものではなく、全体としては従来の川端研究や日本近代文学研究に新たな視点と活力をもたらす論文として高く評価される。とくに第一章・第二章における草稿類や周辺資料を活用しての考証と分析は、論述の若干の粗さを補って余りある研究史的価値を有していると判断される。

審査委員会は、以上のような諸点を総合的に判断し、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。